

ガンダムビルドファイターズ—STBCN—

ブルーデステニー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

暁古城は中学二年の夏にバスケットを辞めた。

古城がバスケット以外で夢中になれる物を探していたある日、彼は友人二人と共にとある遊びにはまってしまう。

注：ガンダムビルドファイターズとストライク・ザ・ブラッドのクロスオーバー

他作品及びオリキャラが登場

目次

ガン普拉バトル？	1
新たな仲間を確保せよ	9
4人目のメンバーは…？	15

ガン普拉バトル？

暁古城はその日自宅近くの商店街にいた。

古城：「… 暇だな…。」

古城は好きだったバスケットを辞め、何か夢中になれる物を探していたが何も見つからず妹の見舞いか町をぶらつくこと位しかやることになかった。

古城：「なんか刺激的な物はねえかなあ… バスケット以外で…」

？：「何してんだお前？」

？：「こんな暑い日にぶらつくなんて珍しいな。」

古城：「一夏とキンジか…」

声をかけられ声が出た方を向くとそこには古城の友人である織斑一夏と遠山キンジがいた。

古城：「バスケットをやめてやることないから適当にぶらついてた。」

？↓一夏：「バスケット辞めた理由はわかるから強くは言えねえけど中2から適当に町うろつくってするか？」

？↓キンジ：「って俺達と言えることじゃねえけどな。俺らも暇だからうろついてたわけだし…」

古城：「お前らもかよ… ま、やることねえなら一緒に行くか…」

キンジ：「だな。」

という訳で3人は一緒に行動することになった。

1時間後…

3人：「… 暇だ…」

一夏：「何でこんな時に限っていつものゲーセン閉まってんだよ…」

古城：「外は暑いし、やってられねえぞ…」

キンジ：「どうする？もう帰るか？」

古城：「そうするか… うん？なんだあれ？」

古城の視線の先には小さな模型店があった。

古城：「模型店…？こんなところにあっただか？」

一夏：「いや無かったと思うぞ。」

キンジ：「俺も見たことねえ。」

古城：「ま、何もすることねえから行ってみるか？」

一夏：「そうしようぜ。」

3人は模型店に入った。

模型店の中は以外と広く様々な模型やプラモデルが所狭しと並んでいた。

キンジ：「色々あるんだな…。」

一夏：「スゲー古いロボットアニメのプラモデルあるぞ…今買おうとしたらものすごい高値のやつ…。」

古城：「せっかくだからなんか買っていこうぜ。一夏が言ってたやつを除いてな。しかし何にしようか…色々あるから悩むな…。」

？：「ならガンプラを買うことをおすすめする!!」

3人：「うおっ!!」

？：「おっとすまない…驚かしてしまったな。私はラル。通りすがりのガンプラ好きだ。よろしく。君たちの名前を教えてもらってもいいかな?」

古城：「あ、俺は暁古城です。よろしくお願いします。」

キンジ：「遠山キンジです。」

一夏：「織斑一夏です。ラルさんでしたっけ?ガンプラは知ってるんですけど何でおすすめるんですか?」

ラル：「ガンプラは様々なシリーズの機体があって自分が好きな機体を作ることが出来る。作品を知らなくてもガンプラの箱の中にある取り扱い説明書にその機体の特徴、登場作品などが載っているため話に分からなくても大丈夫なのだよ。」

キンジ：「おお、それはありがたいな。」

ラル：「すすめた理由がもうひとつある。ガンプラバトルだ。」

キンジ：「ガンプラバトル?」

ラル：「うむ、ガンプラバトルは自分が作ったガンプラをアニメのようには動かし、相手のガンプラと戦う遊びだ。」

古城：「ガンプラを動かす?スキヤニングでCGを作って戦うのか

？」

ラル：「いや、プラフスキー粒子と呼ばれる粒子がガンプラなどに使われているプラスチックに反応し動かすことが出来るようになる。しかもガンダムで出てくる武器による攻撃を粒子を使うことで再現できる。」

古城：「？てことは何か？ビームライフルとかビームサーベルとかで攻撃出来ること？」

ラル：「そうだ。注意する点はバトルで損傷したり撃破された場合は修理しなくてはならないことだ。」

一夏：「再現しすぎだ・・・」

古城：「でも面白そうだな。ラルさん、それって誰でも出来るのか？」

ラル：「勿論。ガンプラバトルは世界大会があるほど人気があるのだよ。」

キンジ：「スゲエな・・・」

ラル：「さて、長々と話してしまったがどうする？ガンプラを作ってみるかね？」

古城：「俺はやるぜ。ガンプラバトルってのに興味がわいた。お前ははどうする？」

キンジ：「俺もやるぜ。」

一夏：「俺もだ。面白そうだからな。」

ラル：「決まりだな。ではガンプラ作りから始めよう。今回は私が決めたリストの機体から好きなものを選んで欲しい。リストの機体は量産機で使いやすい物を選んでおいた。代金は記念に私が払おう。」

キンジ：「いいのか？ラルさん？」

ラル：「かまわんよ。リストの機体は量産機だから代金は比較的安い物ばかりだそれにリストの機体は初心者向けの機体だから丁度いいのだよ。」

キンジ：「そうか・・・じゃ俺はこれにしよう。」

一夏：「俺は・・・これだな。」

古城：「俺はこいつにする。」

ラル：「ふむ… キンジ君はザクⅡ、一夏君はジン、古城君はムラサメか… いい機体を選んだな… では会計をしたらすぐに作ってみよう。」

会計及び製作中…

3人：「できた…」

ラル：「初心者が作ったガンプラだがなかなかの完成度だ… では早速バトルをしよう。とその前に…」

ラルは3人にあるものを渡した。

古城：「これは？」

ラル：「これはGPベースと呼ばれるもので君達のガンプラ製造データとファイターI，D、戦績などを記録するための装置だ。これも君達にプレゼントしよう。データとI，Dはまだ設定されてないから先に登録してからバトルを始めよう。」

ファイターI，Dと基本データ設定中…

ラル：「設定が終わったようだな。ではバトルスタートだ。」

Please set GP base

3人はGPベースをセットする。それと同時に青い粒子が舞う。この青い粒子がプラフスキー粒子である。

Stagelcity

please set yourGUNPLA

3人は互いのガンプラをバトルシステムにセットする。

BattleStart

古城：「コジョウ・アカツキ、ムラサメ、出る!!」

一夏：「イチカ・オリムラ、ジン、出ます!!」

キンジ：「キンジ・トオヤマ、ザクⅡ、出撃!!」

バトルシステムとプラフスキー粒子によって3人が作ったガンプラが動きだしステージ内に射出される。

一夏：「ス、スゲエ… 本当に動いてる。」

キンジ：「マジかよ… てことは…」

キンジはなにもない方向にマシンガンを撃つ。

ズガガガッ!!

キンジ：「射撃もちゃんと出来るのか!!」

古城：「スゲエ・・・俺のムラサメもちゃんと変形したぞ・・・」

ラル：「気に入ってもらったかな？機体の動かし方がわかったらバトルを【danger!!danger!!】!?なんだ!?」

古城達の機体からみて正面の方角から謎の反応がものすごいスピードで接近する。

古城：「な、なんだなんだ!?!」

一夏：「なんかこつち来てないか!?!」

キンジ：「落ち着け!!とにかく警戒を厳にしろ!!いつでも撃てるようにしておけ!!」

謎の反応の正体は・・・

一夏：「青い・・・GM・・・?」

キンジ：「いや、なんか細部と頭が違うぞ?カスタム機か?」

古城：「ッ!?!キンジ!!避ける!!」

GM?：「・・・」

ズガガガッ!!

GMらしき機体はキンジのザクⅡを狙って攻撃する。

キンジ：「うおっ!?!撃ってきやがった!!」

古城：「この!!」

古城のムラサメは戦闘機状態に変形したあとビームライフルを発射する。

しかし・・・

古城：「!?避けられた!!」

ラル：「いかん!!あの機体はブルーデステニー1号機だ!!しかもEXAMが発動している!?!」

古城：「ブルーデステニー!?!聞いたことがある・・・確かユウ・カジマの登乗機!!」

ラル：「そうだ!!ニュータイプを殲滅させることを目的に作られたOS、EXAMを搭載した試作機だ!!気を付けるんだ!!そのOSには殺気を発している敵を容赦なく攻撃する機能がある!!」

キンジ：「わかつ【ズガガガッ!!】 うおっ!!」

キンジの返事が言い終わる前にブルーデステニー1号機（※以後BD1）が手に持ったマシンガンで攻撃する。

一夏：「何でキンジを集中的に狙ってんだ？」

古城：「わかんねえ... けど狙いがキンジに集中してるから俺達が

攻撃に集中すればなんとか撃破出来るはず...」

一夏：「やるしかねえな...」

古城：「だな。」

一夏：「俺が先行する!!古城は上から援護してくれ!!」

古城：「おう!!」

一夏はジンの装備であるマシンガンを撃ちながらBD1に接近する。

それと同時に古城のムラサメがミサイルを発射する。

BD1：「.....」

BD1は二人の攻撃を避けた。

キンジ：「！距離があいた!!」

BD1がキンジのザクIIから離れたため距離ができた。

キンジはマシンガンでBD1を攻撃するが避けられてしまう。

BD1が右手のマシンガンを撃とうとするが上空からのビームが

BD1のマシンガンを撃ち抜いた。

古城のムラサメが上空からビームライフルで攻撃したためである。

BD1はビームサーベルを抜こうとするがその前に一夏のジンが重斬刀で右腕を破壊した。

一夏：「今だキンジ!!」

古城：「決めろよ!!」

キンジ：「ああ!!」

キンジはマシンガンを捨て、バズーカを装備する。

キンジ：「こいつを... 喰らいやがれ!!」

ズドンッ!!

激しい爆発音と同時にバズーカから弾が発射される。弾は真っ直ぐ飛びBD1の頭部に直撃した。

B D I :「?!?!?!」

E X A Mが搭載されていた頭部を破壊したことでB D Iは機能を停止した。

B a a t l e E n d

古城：「勝った…のか？」

ラル：「そうだ、君達の勝利だ!!」

3人：「ツ!!よっしやああ!!」

ラル：「見事だったぞ。まさかE X A Mが起動したブルーデステニイ1号機を撃破することが出来るとは思わなかったよ。」

古城：「正直一対一だったら確実に負けてましたよ…」

ラル：「確かに一騎討ちなら負けていただろう。だが、3人の攻撃は連係ができていたように見えた。」

一夏：「?連係?連係って言われるようなことしたか？」

ラル：「まあ、それはおいておくとしよう。君達の今回のバトルをみて一つ提案がある。」

キンジ：「提案？」

ラル：「二年後にこの島で全国大会の魔族特区部の予選がある。もしこの予選を突破することが出来れば全国大会に出場出来る。そして二年後の全国大会は団体戦が新しく追加されるのだよ。」

古城：「絃神島で予選が!？」

ラル：「そうだ。団体戦は今のところ1つのチーム最大6人まで、最低3人いれば団体戦に出ることが出来る。」

キンジ：「なるほど…。いいたいことがわかったぞラルさん。」

一夏：「この大会に出ろってことですか？」

ラル：「そうだ。今の機体と戦闘能力では勝つことは難しいが二年という長い準備時間がある。」

古城：「それまでに機体と腕を上げろってことか…」

ラル：「そういうことになる。」

古城：「わかった。俺は全国大会に出たい…。バスケット以外に熱くなるものが見つかったんだ…。やめるわけにはいかねえ…」

キンジ：「俺も出る。個人で出るよりこっちのほうがいい。」

一夏：「俺もだ。団体戦のほうが絶対面白いだろうしな!!」

ラル：「決まりだな。」

古城：「ラルさん。あんたに感謝するぜ。あんたと出会わなければこんなに熱くなれて楽しいことを知らずに生活してたかも知れねえ。」

ラル：「気に入ってもらって何よりだ。連絡先を交換しよう。私はこの島の住民ではないため会うことは難しいがアドバイスをすることは出来るだろう。」

古城：「そうか。なんかあつたときは宜しく頼む。」

ラル：「うむ、つとそろそろでないと船に間に合わないな。ではさらばだ、古城君、キンジ君、一夏君。」

ラルは模型店を出た。

古城：「全国大会に出るにはまず強い機体と腕上げねえと絶対勝てない・・・」

キンジ：「そうだな・・・それにメンバーも俺達3人じゃ数が多いところになる。」

一夏：「二年後の大会予選までに強くなってメンバーを揃えないとな・・・」

古城：「やることは沢山あるけど絶対に全国大会に出場してやる!!」

キンジ：「ああ!!」

一夏：「やろうぜ!!」

3人はその後店にあるガンプラと道具を幾つか買ったあと自分達の家に戻った。

二年後・・・彼らの物語は一気に加速する。

新たな仲間を確保せよ

古城達がガンプラバトルを始めて二年がたった。

3人のバトルの腕と機体制作技術は格段に上昇していた。

3人は搭乗機体を最初に作った量産機から別の機体にした。

それにより、自分のバトルスタイルで戦うことが出来るようになり、バトルで勝利しやすくなった。

しかし…

side：喫茶店

古城：「これより緊急会議を始める。議題はお前らもよく知っている物だ。」

キンジ：「やっぱりあれか？」

一夏：「あれしかねえよなあ…」

3人：「メンバーが集まらねえ!!」

緊急会議の議題… それは出場メンバーが古城達3人ともう1人の合計4名だけということである。さらに…

キンジ：「あいつの調子はどうなんだ？」

一夏：「順調に回復してるけど復帰できんのは早くて二回戦からだって…」

古城：「そうか…」

現在もう一人のメンバーは入院中の為初戦から出場出来ないという事態になっていた。

古城：「とにかく、明日は入学式だ。うちの学校は中高一貫式の学校で中高合同で部活作っていいところだから中等部のやつにも声をかけるぞ。いいな？」

一夏：「了解。そうだ、明日の勧誘終わったらあいつに会いに行かねえか？」

キンジ：「そうするか…」

古城達3人は会計をしたあと店を出た。

翌日…

side：彩海学園

古城：「ガン普拉バトル部!!部員募集中!!高等部とか中等部とか関係なく入部出来るぞ!!」

一夏：「目指せ!!世界大会!!」

キンジ：「見学大歓迎!!高等部部室棟三階の部室で活動している!!是非来てくれ!!」

数分後、勧誘許可時間が過ぎたため、部室に戻っているときだった。

キンジ：「うん?おい古城…なんか知らんが…」

古城：「付けられてるな…」

一夏：「とりあえず…部室に誘導しようぜ。メンバーゲットのチャンスだ。」

誰かを誘導中…

部室前到着。

古城達は部室に入った。

追跡していた誰かは少し離れた場所から部室に徐々に近づいてきた。

古城：「よし、タイミング合わせろ。」

一夏：「追跡者、部室到着まで残り約10秒…」

キンジ：「到着まで、5, 4, 3, 2, 1…」

3人：「確保お!!」

追跡者：「ッ!」

3人は容赦なく追跡者を捕獲。抵抗される前に部室に入れた。

追跡者：「な、なんですか!?!これ!?!」

3人：「えっ…?」

追跡者の正体は中等部の制服を着た少女だった。

古城：「あ、なんかごめん…」

追跡者：「!?!第四真祖!?!」

古城：「は?」

side：部室

古城：「何で俺が第四真祖だってことしってたんだ?」

追跡者↓雪菜：「私は獅子王機関の剣巫、姫柊雪菜です。貴方の監視役としてこの島に来ました。中等部三年です。」

キンジ：「獅子王機関？確か魔族テロとかを防ぐための組織だよな？」

雪菜：「はい。」

一夏：「姫柊だっけか？一応確認するけど、こいつがなんか悪いことをしないように監視するために来たんだよな？」

雪菜：「そうですね…？」

古城：「いくら何でもやり過ぎじゃねえのか？俺がああバカに力押し付けられてまだ1ヶ月しかたつてないぞ。それに変なことするつもりは一切ねえぞ。」

雪菜：「は？なって1ヶ月？」

古城：「ま、それは置いてだ… 姫柊。」

雪菜：「なんででしょうか？」

古城：「監視するってことは基本的に俺と行動するってことになるよな？」

雪菜：「そうですね。」

古城：「なら、お前この部活に入らないか？」

雪菜：「？この部活にですか？」

キンジ：「成る程その手があったか。」

一夏：「ここ、ガン普拉バトル部は世界大会出場を目標にして活動しているんだ。俺達は団体戦に出場するつもりなんだがメンバーが少なくて困ってたんだ。」

古城：「だから入部してくれると助かる。」

雪菜：「ガン普拉バトル？」

古城：「ガン普拉バトルってのはな…。」

説明中…

雪菜：「ルールはわかりました。でも私はガン普拉を持ってませんし、作り方もわかりません。」

一夏：「大丈夫。何個かここに作ってないガンプラがあるからそれを使って作ってもいいし、他の機体が欲しいならあとで模型店とかで買えばいい。2000円くらいあれば買えるからな。勿論作り方は俺達が教える。作るのが苦手ならファイターとして戦うっていう手

もあるし、逆に戦うのが苦手ならビルダーとして活動するのもいい。
キンジ：「折角だから実際にガンプラバトルをやってみるか？」

雪菜：「いいんですか？」

古城：「全然大丈夫だ。機体は練習用の量産機を使えばいいし。とりあえずお前はこれ使ってみな。」

古城は陸戦型GMを雪菜に渡す。

古城：「こいつはGMっていう機体のバリエーションの一つで陸戦型の機体だ。装備としてはマシンガンとバズーカ、ビームサーベル、シールドだ。じゃ、今から動かしかたを教えるぞ。」

動かしかた説明中…

一夏：「よし!!これで基本的な操作は全部教えた!!早速バトルだ!!
今日は時間あんまねえから時間制限ありでやるぞ!!」

Please set GP base
stage 3 forest

Please set your GUNPLA

雪菜は陸戦型GM（※以後陸GM）をGPベースの上に乗せ発進準備をする。

古城も同じく初代登場機ムラサメをGPベースの上に乗せた。

Battle start

雪菜：「ユキナ・ヒメラギ、陸戦型GM、行きます!!」

古城：「コジヨウ・アカツキ、ムラサメ、出るぞ!!」

機体がステージに射出され、バトルが開始した。

雪菜：「先手は頂きます!!」

雪菜はバズーカを発射する。

しかし、距離があったため古城は軽く避けてしまう。

古城：「そんな遠いところから撃っても当たらないぞ!!」

古城はムラサメを戦闘機形態に変形させ、雪菜の陸GMの近くまで一気に接近する。

雪菜：「!?変形した!?!」

雪菜はバズーカを捨て代わりにビームサーベルを装備した。

古城もムラサメをMS形態にもどしてビームサーベルで攻撃する。

雪菜は盾で攻撃を防ぎ、ビームサーベルで反撃する。その時雪菜は違和感を感じていた。

雪菜：(GMの反応が遅い…。？私の反応速度に対応できていないの?)

古城：「ぼーっとしてる場合か?」

雪菜：「ッ!?!」

古城はいつの間にか左手に持っていたビームライフルで陸GMの左肩を撃つ。

ビームライフルから放たれた光は陸GMの左肩を撃ち抜いた。

雪菜：「くッ!?!お返しです!!」

雪菜は武器をマシンガンに変更し、反撃する。

古城：「うおっ!?!本当に始めてかよ…。？反撃の速さが速すぎる!!」
マシンガンによる攻撃をギリギリのところまで避ける。

丁度その時バトルシステムからタイムアップのブザーがなった。

B a a t l e e n d

プラフスキー粒子の放出が止まり、機体が動かなくなった。

古城：「今回は俺の勝ちだ。けど、今の反撃は良かったぞ。」

雪菜：「ありがとうございます。」

一夏：「で、どうだった?ガンプラバトルは?」

雪菜：「面白いです!!けど…。」

キンジ：「けど?なんかあったのか?」

雪菜：「機体の反応速度が思ったより遅かったので思いどおりに動かせなかったです。」

キンジ：「そうか…。？ってあれ…。？悪い姫終、お前使ってたGM見せてくれ。」

雪菜：「?はい。」

キンジは何かに気がついたのかGMを調べ始めた。

キンジ：「おいおい…。？これで反応が遅い…。？どんだけ反応速度

が速いんだよ…」

一夏：「どうした？」

キンジ：「これ古城が作った反応速度重視カスタムだ…」

一夏：「はあ!?古城お前なんてものを初心者に渡してんだ!？」

古城：「すまん… 機体に印着けんの忘れてて自分でも気づかなかった… てか、その機体のカラーリングで思い出したけど練習用で作った機体で一番反応速度高いやつだそれ…」

一夏：「マジかよ… まあ、とにかく1つだけ言えることがある。姫柊はファイター専門で活動確定だ。」

キンジ：「そうだな… 初心者にこいつを越える反応速度を持った機体作りは難しいからな。」

古城：「姫柊の機体は俺が作る。反応速度が速い機体を作ってるところだからそいつで試してみよう。」

雪菜：「わかりました。」

古城：「とりあえず今日の活動はこれで終わりだ。戸締りするから出てくれ。」

一夏：「了解。俺達は校門で待ってる。」

キンジ：「集まったらあいつの見舞いに行くぞ。」

雪菜：「あいつ?」

古城：「もう一人のメンバーだ。今入院してんだよ。姫柊、お前もついてこい。新しいメンバーになったんだ。顔見せ位はやつとかねえとな。」

四人はもう一人のメンバーが入院している病院に向かう。
もう一人のメンバーとはどのような人物なのか…

l i n f o r m a t i o n

姫柊雪菜がガン普拉バトル部に入部した!!

4人目のメンバーは…？

side：病院

一夏：「ここだ。サキ、入るぞ。」

一夏はドアを病室に入る。

しかし、病室の中には誰もいなかった。

古城：「おかしいな…急な病室変更とかがあったら連絡するって
いったのに…」

キンジ：「だとすると屋上か？一回行ってみるか…」

メンバー移動中

side：病院屋上

？：「やっぱり屋上は最高です。風が気持ちいいし本を読むには良
いところですね。」

一人の少女が屋上のベンチに座りながら本を読んでいた。

一夏：「やっぱりここにいたか、サキ。」

古城：「ほんと、屋上が好きなんだなおまえは…」

キンジ：「ま、その気持ちはわからんでもないけどな。」

？↓咲希：「？どうして一夏達が？」

少女… 桜坂咲希は古城達の姿を見ると本をとじ、古城達の所に向
かう。

一夏：「見舞いだよ。調子はどうなんだ？」

咲希：「順調に回復してますよ。」

一夏：「そうか…とにかく治ったら一緒にバトルしようぜ。」

咲希：「はい。ところで古城の後ろにいるのは誰ですか？」

古城：「新しくガンプラバトル部に入った姫終雪菜だ。ちなみに俺
の監視役。第四真祖だっということ知ってる。」

咲希：「新しい仲間ですか。私は桜坂咲希です。よろしく。」

雪菜：「よ、よろしくお願ひします。」

咲希：「機体はなにを使ってるのですか？」

雪菜：「今は部屋にあった陸GMを使わせてもらってます。暁先輩
が新しい機体を作ってくれるみたいなのでそれができ次第そちらの

方を使わせてもらおうつもりです。」

咲希：「成る程・・・古城さん、姫終さんにどんな機体を渡すつもりなんでしょうか？」

古城：「反応速度と機動力、近接重視の機体だ。本体のパーツ自体は出来てるけど武装がまだ完成してない。」

咲希：「そうですか・・・話は変わりますが・・・近々この病院の近くでガン普拉バトルの大会があるのは知っていますか？」

キンジ：「いや、初耳だ。内容は？」

咲希：「バトルロワイアル形式の大会です。初心者向けのバトルロワイヤルもあるので良かったら姫終さんを出場させてみてはどうですか？ダメージランクはCなので丁度いいと思いますよ。」

雪菜：「ダメージランク？」

キンジ：「損傷がどのくらい出るのかの位だ。Cランクは最近できたダメージランクだ。機体をスキヤニングしてホログラムにして戦うから故障しない。初心者向けなんだよ。」

古城：「姫終、お前の機体は2日もあれば実戦に使えるぐらいにはなる。武器は部室にあるやつしかねえけど、お前の腕なら大会までの時間をならしと特訓に使えるば優勝するかもしれない。どうする？出てみるか？」

姫終：「出てみたいです。」

古城：「了解、帰ったら早速作業に入る。完成したらすぐに渡すからそれまで部室の機体で特訓するといい。」

看護士：「桜坂さん、ここに居ましたか。そろそろ診察時間ですよ。」
咲希：「あ、はい。すぐいきます。すいません、今日はここまでで。」
一夏：「ああ、じゃあなサキ。また来る。」

古城達は病院を出た。

— information —

ガン普拉バトル部第4の部員桜坂咲希の見舞いに行った!!

【オマケ】

古城：「さて、これからどうするっ？」

キンジ：「あ、そうだ。俺新しいガンダムのゲームを買ったんだ。お前らもやってみるか？」

一夏：「いいのか？」

キンジ：「おう、対戦できるやつもあるし時間結構潰せると思うぜ。」

古城と姫柊はどうする。」

古城：「俺もやらしてもらおう。武器の案が浮かぶかも知れねえからな。」

姫柊：「先輩が行くなら私も行かせてもらいます。」

全メンバー移動中：「

古城：「そういや、姫柊ってどこに住んでいるんだ？」

姫柊：「明日から〇〇マンションの705号室に住むことになりました。」

3人：「ちよつと待てや!!」

姫柊：「ど、どうしたんですか？」

古城：「〇〇マンション705号室ってうちの隣じゃねえか!!」

姫柊：「監視役ですからすぐに対応出来る場所にいないといけないんです。」

一夏：「だからってそこまでやるか普通?!」

キンジ：「てか、今ここにいるメンバー全員同じマンションじゃねえか!!」

姫柊：「え？なんですか？それ？すごい偶然ですね。」

キンジ：「そうだな・・・因みに俺は702号室で一夏は701号室だ。」

side：マンション702号室

キンジ：「古城、姫柊が使うやつは武装はどうするつもりなんだ？あの機体が射撃装備を使ってるシーンってあんま無かったと思うんだが？つとチャージ完了からの発射!!」

古城：「うわっ!!きたねえな!!射撃武装はマシンガンと頭部バルカンのみだけ!!オラッ!!分身攻撃発動!!」

一夏：「お前ら喋るか戦うかどっちかにしろよ!!」ドカアアッ!!
「!!」ってやられた!?!」

雪菜：「油断大敵ですよって何かこっちに来ました!？」
数分後対戦が終了し、時間がいい感じにたったため各自の自宅に
戻っていった。